

ひろば

社会福祉法人天上会 広報誌
2026年 春号



田原さん、上籠さんの門出を祝して

産業医着任のご挨拶

産業医 吉重幸一



この度、社会福祉法人天上会の産業医に着任いたしました吉重幸一と申します。

平成10年熊本大学医学部を卒業し同年鹿児島大学第3内科に入局、以後鹿児島県内の医療機関に勤務し、平成20年8月に社会福祉法人内之浦会吉重クリニックを開設し現在に至っております。内科が専門であり、総合内科専門医と日本感染症学会専門医を有しています。もともと内之浦が実家であり小学6年生まで住んでいました。社会福祉法人内之浦会理事長が私の父親であったこ

ともあり、僻地の医師不足、特養銀河の里・グループホーム銀河の里の施設入所者の転診医としての責務があり内之浦に帰ってまいりました。

産業医とは従業員の健康を守るための業務を行う医師です。同じ肝付町ということもあり、これから社会福祉法人天上会職員の健康管理、快適な職場環境づくりにお手伝いができればと考えておりますので今後ともよろしくお願いします。

法人祭 「天上会 ともに生きる つながる2025」

法人祭実行委員長「わたぼうし」末吉 紘也

今年、数年ぶりに法人祭を開催することが決まり、その場に実行委員長として携わらせていただきました。今回は「マルシェ」という形を取り入れ、外部の方へ販売を依頼する初めての試みを計画しました。依頼の段階からキッチンカー探しに苦戦し、なかなか決まらない日々が続きましたが、周りの方々からの意見や紹介もありなんとかキッチンカーや鹿屋中央高校調理クラブの皆さまの2店舗が参加して下さることになりました。当日は雨も心配されましたが、天気にも恵まれ皆様の協力のおかげで無事に開催を迎えることができました。どのく

らい集客が見込まれるのか全く想像がつかず、参加して下さる中で「果たして売れるのか」とも心配しましたが、どちらも大盛況で完売したとの嬉しい報告を受けすごくほっとしました。何より利用者の方やそのご家族から「楽しかった」「ありがとうございました」等の言葉をいただいたことが一番うれしい出来事でした。

今後も利用者の方やご家族、地域の皆さま、そして職員も一緒に楽しみ、参加できるイベントを法人全体で実施していけたらと思います。



職員の思い



初めての天上会でのやぶさめ祭り

法人本部 事務員 黒木 めぐみ

「練習したらできるよね」

祭りの踊り初挑戦の私に声をかけてくれたのは利用者さんでした。「そうだよね」とお互い声をかけあい、励まされ食堂での練習に励む日々。ごこない動きも次第に大きくなる掛け声に圧倒され、笑顔の練習場になりました。本番、無事に踊り終えたあとは「できたね」の両手タッチでした。

地元のお祭りとして長年見慣れてきた風景でしたが、「できたね！」の気持ちで参加したのは初めてでした。

ケガなく無事に終えられた背景には、事業所間を超えた皆さんの心配りがありました。隊列の構成、備品・法被の準備、何より利用者さんの安全に目を配る体制。楽しみながらも油断せずに支援にあたる皆さんの先に日常とは違う「特別な笑顔」があると実感しました。

入職して初めて、皆で取り組む利用者さんの笑顔が見られたイベント。終了してすぐに次年度にむけて反省や改善が共有され、私も前向きな姿勢を見習って、細やかな心配りができるようにしていきたいと思います。

利用者との関わり

新樹楽園 支援員 堀添 友乃

夜勤明けの朝、ある利用者さんへの対応がうまくいかず、受け入れてもらえない場面がありました。固執も強くなり、私の関わり方が間違っていたのではないかと、その方との信頼関係が十分に築けていなかったのではないかと感じ、落ち込みました。そんな中、利用者さんがその利用者の固執が出た際に私を守るように前に立ち、私の近くへ、その利用者さんが近づくと立腹される様子がありました。固執が落ち着いた後も私自身気持ちが整理できず落ち込んでいたのが伝わったのか、Kさんが突然泣き出すこともあり、私が「大丈夫

ですよ」と声を掛け背中を摩ると泣き止むという場面が何度もありました。その時、私はKさんが周囲の感情を敏感に感じ取っている事を改めて実感しました。それから仕事が終わるまで守るようにそばにいてくださいました。仕事が終わって、「今日はありがとうございました。もう大丈夫ですよ。」と伝えると笑顔で手を振り見送ってくださいその温かさが心に残りました。そしてその日以降、出勤すると「おかあたん、おかえりなさい」と小走りでお出迎えしてくれるようになりました。Kさんの目線では一職員ではなく、共に生活している一人として受け入れてもらっているのではないかと感じ、とても嬉しく感じました。

施設外就労

カイロス 支援員 柿元 祐志

今年はカイロスにおいて、数年ぶりとなる施設外就労の復活の年となりました。施設外就労とは、文字通り施設の外に利用者様たちと働きに行く作業のことです。工場での作業でしたが、利用者の皆さまは初めての作業でも臆することなく、工場の方々に元気よく挨拶をし、積極的に作業に取り組まれていました。皆さんに「園外作業は楽しいですか？」と聞くと、笑顔で「楽しい」と答えて

くれました。先日、ファーム会議にて、今回の施設外就労の復活で今年はカイロスの目標でもあった平均工賃1万円を超える見込みがあるという事を知り、この数年ぶりの施設外就労が印象に残りました。施設外に行き始め、たくさん出たお給料で「いろいろ買うんだ」と言って、作業へのモチベーションが高まる利用者の方もいました。残念ながら今月でこの施設外就労も終わりとなりますが、施設の外に出て社会の一員として働くことに喜びを感じている利用者様の姿をみて、来年もこのような機会を作れるように頑張っていこうと思いました。

震度5の地震

新樹楽園 生活支援員 大迫 美沙子

1月13日(月)PM21:19頃 宮崎県沖で震度5の地震が発生しました。大隅地方の広い範囲でも最大震度4を観測しました。私はその日、夜勤入りでした。通常通り勤務にあたっていたところ、先にガタガタと大きな音が館内に鳴り響いた後、強い揺れが起きました。恐怖と驚きから壁を支えながらその場から身動きが取れなくなり、揺れが収まるのを待っていたのを鮮明に記憶しています。揺れが収まったと同時に、利用者さんや職員の安全確認のため、施設長や上司からの電話が鳴り対応しながらも、宿直者、男性夜勤者と安全確認を行いました。また居室に設置されてる人感センサーが次から次に鳴るので、安全確認を一部屋一部屋行いました。幸い利用者さんにも、建物にも被害はありませんでした。情報収集のため、テレビを付けると「引き続き強い揺れに注意してください。いつでも避難できるよう準備をしてください。」等のアナウンスが何度も繰り返されていました。「落ち着いて、落ち着いて」と自分に言い聞

かせるために声に出しながら、いつでも避難が出来るように利用者さんに靴下を履かせたり、上着や靴、車いすを近くに準備したりしました。そうしながらも、心配だったのはやはり子どもたちのことや家のことでした。これ以上に強い地震が来て利用者さんを避難させなければならなかったり、家屋倒壊があったら…、二度と子どもたちには会えないかもしれない。家にも帰れないかもしれない。最悪な状況ばかり考えながら夜勤業務にあたっていました。幸いにも、余震も無くそのまま朝を迎えることが出来てとてもほっとしたことを今も覚えています。特に夜勤業務は各棟一人で当たるため、天上会のBCP発動基準もよく頭に入れ、何も起きない事を一番に願いながら、最悪な状況になってしまった時に自分はどうに動いたら良いのか想定しながら、これからも新樹楽園45名の命を守り続けなければならないと思っています。



物価高騰と米不足

新樹楽園 管理栄養士 関 久美子

2025 今年の漢字は「熊」に決まりましたが、私にとっては第2位の「米」につきました。米余り、米抜きダイエット、米よりパン派等と巷では言われ続け、米を主食にしてきた日本人は「米」はいつでもどこでも手に入り、米の良さやありがたみをあまり感じることなく過ごしてきたところもあったかと思います。昨年からコメ不足、価格高騰、備蓄米の放出等で、まさか備蓄米の古×3米、古×4米の争奪戦になろうとは誰も想像し得なかったことだと思います。

天上会は給食を委託会社に委託しており、取引規模も大きいので国の入札等で備蓄米の確保が可能になり、米が入らない状況にはならなくて済みましたが、施設内で給食自営されている栄養士さんたちは死活問題だったと思います。給食では普段通り何気なくご飯を食べる事が出来ていますが、裏方ではコメの確保に翻弄され奔走した一年だったと思います。今はだいぶ落ち着いてきましたが、

備蓄米は価格が抑えられても使い終われば新たな米は2倍以上の値段で取引をしなければなりません。また米と比較して続く物価高騰、パッケージは小さく量も少なくなり値段も上がる一方で、全ての食品や物が値上げしているのではないかと疑うほど、値上げが止まる事のない一年でした。食材料費自体も非常に厳しくなり、給食スタッフの人員不足やスタッフの高齢化の問題もあり、何かと明るい展望が見えにくくなりがちです。今後、予算的に出来る事が限られてきますが、出来ないことばかりを考えず、どうしたら出来るのか、何が出来るのかと創意工夫し利用者さんが喜ぶような食事の内容やイベント等を企画して食事の楽しさにつなげていけたらと切に思う一年の出来事でした。



地|域|交|流|

11/9(日) 鹿屋吹奏楽団

20余名の団員が新樹楽園活動室を訪れ、「上を向いて歩こう」や「愛の花」を演奏してくださいました。特に「YOUNG MAN」は盛り上がりしました。指揮者の横に出てきて踊ったり歌ったり、利用者さんも思い思いに楽しんでいらっしゃいました。



12/10(水) 敬愛園バンドクリスマス演奏会

星塚敬愛園、山元園長より「星塚敬愛園でバンドを組んでいます、是非新樹楽園で演奏させてもらえませんか」と依頼があり、新樹楽園活動室で演奏会が開かれました。利用者の皆さん、迫力あるドラムの響きサックスの音に興奮し自然と手拍子が溢れていました。



二|十|歳|の|お|祝|い|

カイロス / わたぼうし合同で行いました (お母さまからのメッセージ)



はじめての子育て、障がいと向き合う日々が、息子が一歳半の頃から始まりました。体が大きくなるにつれ、発達の遅れが顕著になり、不安な毎日で、二十歳になる我が子の姿など想像すらできず、それでも時々、大人になった時どんな暮らしをしているのだろうと悲観的になりました。今回、盛大なお祝いの会をたくさんの利用者様、職員の皆さまに催していただき、とても感動しました。息子はたくさんの方々に支えられ、社会生活を送ることができているのだと、感謝の気持ちでいっぱいです。

海都へ。元気にわたぼうしに通っていますね。立派な社会人だと思います。周りの人にありがとうございますの気持ちを忘れずに、一日一日を過ごしてください。

わたぼうし利用者：大井様のお母様より



成人を祝う会を盛大に催していただき、理事長先生をはじめ、ご参加くださった皆さまに心より感謝申し上げます。めぶき園から学童療育うと、カイロスへと続く20年の歩みを振り返る映像に、とても感慨深く胸が熱くなりました。天上会の皆さまに支えられ、この節目を迎えられたことは親子共々幸せです。今後ともよろしくお願いいたします。

カイロス利用者：牧野様のお母様より



つるた けいこ
鶴田 景子

- ① 声が大きい・水回りの掃除
大好き・スカッとします
- ② 挨拶・向上心
- ③ グルメ・スイーツ店巡り・
ゲーム・朝ドラ鑑賞・旅行
- ④ 為せば成る・時は金なり・
大丈夫

新任職員紹介



新たに当法人へ入職した7名の職員を紹介します。
新しい仲間とともに質の高いサービス提供に努
めて参ります。

- ① アピールポイント
- ② 仕事に欠かせないもの
- ③ リフレッシュ方法
- ④ 好きな言葉



やました あつこ
山下 敦子

- ① 笑顔・声掛けが優しいね
と言われる
- ② 気持ちのいい挨拶・笑顔
- ③ おいしい物食べる。
- ④ 失敗は成功の基



まつもと りつこ
松元 律子

- ① 元気
- ② 体力
- ③ 好きなものを作り(料理)・
好きな〇を飲む
- ④ ケセラセラ (Que Sara sera)



きのした しおん
木之下 詩音

- ① 異道なところ
- ② コミュニケーション
- ③ 舞台鑑賞、ゲーム
- ④ コツコツ・歩すつ



とみなが やすこ
富永 康子

- ① 元気・楽観的
- ② 職員会でのコミュニケー
ション・自己管理能力
- ③ おいしい物食べる。飲む。
- ④ ケセラセラ



にし はら
西ノ原 しのぶ

- ① 睡眠時間が短くても元氣
に動ける！
- ② 報道番組・思い切り
- ③ 娘と買い物・一人で車を
走らせる
- ④ 一歩一歩

支える人

第11回

～送迎ドライバーさんたち～



通所系サービスの就労継続B型カイロスと生活介護わたぼうしでは肝付町や近隣市町のご自宅から通われている利用者さんたちが利用されています。ご自宅と事業所をつなぐ大切な業務をしているドライバーさんの皆さんにインタビューをしてみました。

質問

- Q1 利用者さんたちと関わる中で心掛けていることは何ですか？
- Q2 この仕事(障がい福祉)に就いてみて感じることはありますか？
- Q3 送迎のときに気をつけていることは何ですか？

【送迎員】..... 上國 朗さん

- A1 毎日の声掛け「おはよう」「今日も頑張って」「また、明日」など
- A2 それぞれの利用者さんが自分なりに努力している。そんな姿に勇気をもらっている。
- A3 安心と安全を感じてもらえる運転を心掛ける。



【送迎員】..... 下園 良臣さん

- A1 話をよく聞くように心掛ける。
- A2 親の気持ち
- A3 交通安全に心掛ける。



【送迎員】..... 西久保 浩さん

- A1 健康者として接する。
- A2 一日は一生の縮図なり
- A3 利用者さんの安全と笑い





利用者との関わり

新樹楽園施設長 谷山 ゆうこ

今年は、男性利用者のOさんが脳内出血で倒れられ、半身不随と胃ろうになったことが、一番残念で悲しい出来事でした。

「訴えができない方々の、我々は代弁者にならないといけない。」などと簡単に言っていた自分が、何とも浅はかで無力な存在なのだと、痛感しました。胃ろうになった54歳のOさんには、ご本人の安全を第一に考えると、これからの人生のほとんどを制限のある生活をお願いすることになると思います。元気な時の「拘り」は、その方の「特性」と捉え対応できていたことが、命に関わる場面では「許されない行動」と捉えられ、今までの支援を全否定されてしまうような感覚に陥ってしまいそうになります。

まだ、退院されていませんので、新樹楽園に帰ってこられた後、私たちにできることは何なのか、見極めていかなければなりません。Oさん自身が一番不安で戸惑っていることだと思いますので、「ここで安心して生活できるのだよ」ということを感じてもらえる支援をしていきたいと思っています。何が正解なのか分かりませんし、Oさんからのはっきりとした回答も、きっともらえないと思います。知的障害の方の支援の難しさを身に染みて感じた令和7年でした。



気づきと視点

相談支援事業所 管理者 松元 竜二

「私たち相談支援専門員は、利用者の方々が失敗しないためにいるのではなく、失敗したり困ったりした時に寄り添うためにいるのです。その方が、ギャンブル等に没頭して生活に困ったとしても、その時に寄り添える存在でありたい。また、本人が没頭することで生活に困ったとしても、それも立派な本人の権利で「愚行権（他者から見て愚かであると評価される行為であっても、個人が自由意志に基づいて行う権利を指す）を行使している」ということ。再犯してしまう生き方もまた本人の選択。そこに寄り添ってあげたいですね。」これは、ベテラン相談支援専門員さんにかけられた言葉です。

矯正施設から地域での生活をGHで再開した方がいました。数ヶ月GHで生活しましたが、自宅での生活意向があり、生活環境が整っていない自宅での生活を再開することになりました。私のなかでは、「再犯しないこと」が中心となっており、その決定を応援できていない自分がいました。結果、その方は相談支援契約を終了。本人中心であるべき支援が、支援者の想いになっており、本人の想いを汲めていなかったのです。「再犯しても大丈夫。」「何度でもやり直せるよ。」の視点が私にあれば、この方への支援は、今も継続していたと思います。



AI時代に思う

こども発達支援センターめぶき園 園長 新保 真一

ある紙面を作成する時、試しにAIを使ってみた。指定したワードを入れたら、実に上手くまとまった文章があがってきた。ただ、何か物足りない。間違いない文章のはずなのに。何故だろう…そうか、心に響かないのだ。そこには個性を感じず、人が書いた時のような不完全さも無い。逆に、その不完全さが味わいでもあるはずなのに。

では、支援現場はどうだろう。以前、訪問先で子どもの支援について話し合っていた時、「コツはありますか？」と聞いてきた職員さんがいた。私は一瞬、考えた。コツか…そんなものは無い。時間、場面、全く同じ状況はあり得ないし、人は日々新しい自分を生きている。相手も私もその時によって気持ちが変わることもあるし、お互いの関係性だってある。確かに、マニュアルが存在しない支援は簡単ではない。いつも「私」という個人で向かわないといけないから、気力が保たなくなる時だってあるだろう。

カウンセリングという仕事でもAI論争がある。AIは、疲れ知らずで話を聞いてくれるし、どんな疑問や悩みにも一定の答えを出してくれるが、人にとって代わるといえる話にはなっていない。つまり、訪れる人は、正解ではなくて、カウンセラーが心で聴くことを求めているということなのだろう。

改めて、私たちの現場は、人を相手にする仕事だ。心が動き、光の见えないトンネルに苦しいこともあるけれど、不完全さや不確かさの中から物語が生まれたり、お互いの成長につながったりする可能性も秘めている。私はこの世界に入ってから20年経つが、どれだけ経験を積んでも「心」を忘れずにいたいし、めぶき園管理者としても「心」ある事業所を守り続けていきたいと思っている。ちなみに、この文章はAIに頼らずちゃんと自分で書いたものである。(注)

有留太樹さんを偲んで

わたぼうし：生活支援員 榎井 明希

2月8日、早すぎるお別れでした。

太樹さんは、わたぼうしを週2回ご利用されていました。職員や利用者にスキンシップを求め、嬉しそうに笑う顔や声、歩行の際は、職員と午後からの活動の話をしたり、時には動物の鳴きまねをしたりと人と関わるのが本当に大好きな方でした。去年、保護者の方より「血液検査の結果が思わしくなく、抗がん剤治療をすることになりましたので、しばらくお休みします。」と、連絡がありとても驚いたことを今でも覚えています。それから2カ月後、利用を再開され、また太樹さんと会えてとても嬉しかったです。しかし、再度の血液検査で余命を告げられたということでしたが、私たちは絶対に戻って来てくれると信じていました。何より自宅では大好きなケーキをワンホール食べていると聞いていたので、誰もが大丈夫だと思っていましたが、余命を告げられてから1週間ほどで天国へと旅立たれてしまいました。もう太樹さんに会えない事が本当に本当に寂しいです。

太樹さん、たくさんの笑顔をおりがとうございました。
天国からみんなを見守っていてください。

謹んでご冥福をお祈りいたします。



編集 後記

「春」というと、気持ちも軽やかなイメージですが、私が所属している相談支援事業所は、3月・4月が一番忙しい時期になり、年明け頃からソワソワしだし、「あー、もう〇日になったー」と半ば悲鳴のような声が聞こえ、時間に追われる日々を送っています。なぜ、その時期が忙しいかと言うと、小学生になる子、高校を卒業して児童から大人になる方の計画が入ってくるからです。ですが、慌ただしい時間の中でも「もう小学生になるんだね」「あの小さかった子が、もう大人になるんだね」と、その方の人生と一緒に見守り、歩むことが出来るのが、拓(ひらく)の仕事の良き点でもあると思います。

今年も利用者の方やご家族の方と一緒に成長やその方の幸せの形を探していけるように「共に生きる」相談支援事業所 拓(ひらく)であるように努めていきたいと思っています。今後ともよろしくお願いいたします。

相談支援事業所 拓(ひらく)：相談支援専門員 西濱里江